

和辻哲郎

藤村の個性

藤村の個性

藤村は非常に個性の強い人で、自分の好みによる独自の世界というふうなものを、おのずから自分の周囲に作り上げていた。衣食住のすみずみまでもその独特な好みが行きわたっていたであろう。酒粕さけかすに漬けた茄子なすが好きだといっているので、冬のうちから、到来物とうらいものの酒粕をめばりして、台所の片隅に貯えておき、茄子の出る夏を楽しみに待ち受ける、というような、こまかい神経のくばり方が、種々雑多な食物の上に及んでいたばかりでなく、着物や

道具についてもそれぞれに細かい好みがあった。そうしてまたそういう好みを実に丹念に守り通していた。

住居についてもそうであった。新片町しんかたまちや飯倉片町の家

は、借家であつて、藤村の好みによつた建築ではないが、しかしああいう場所の借家を選ぶということのなかに、十分に藤村の好みが現われているのである。随筆集の一つを『市井にありて』と名づけている藤村の気持ちのうちには、その好みが動いているように思われる。市井にある庶民の一人としての住居にふさわしい、ささやかな、目だたない、質素な家に住むことを、藤村は欲したので

あろう。しかしそういう住居のなかには、市井庶民の好みに合うような、さまざま凝った道具が並んでいなくてはならなかったであろう。あるとき藤村は、置き物を一つか二つに限った清楚な座敷をながめて、こうきれいに片づいていると、寒々とした感じがしますね、と言ったことがある。

その藤村が自分の家を建てたいと考え始めたのは、たぶん長男の楠雄さんのために郷里で家を買ったころからであろう。「そういう自分は未だに飯倉の借家住居で、四畳半の書斎でも事はたりると思いながら自分の子のた

めに永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行為だ」という言葉のうちに、それが察せられる。が、その時に藤村が考えたのは、たぶん、ささやかな質素な家であったであろう。というのは、その家のために藤村が麻布あざぶのどこかに買い求めた土地は、六十坪だということであった。この計画は後に変更され、麴町こうじまちの屋敷はたしか百坪ぐらいだったと思うが、しかしその後にも、大きい住宅に対する嫌悪の感情は続いていた。あるとき藤村は、相当の富豪の息子で、文筆の仕事に携わろうとしている人の住宅の噂うわさをしたことがある。藤村はその

住宅の大きく立派であることを話したあとで、あの程度の仕事をしていながら、あんな立派な家に住んでいて、よく恥ずかしくないものだと思いますね、と言った。それは藤村としては珍しくはつきりした言い方であった。私はそれを聞いて、藤村の質素な住宅に対する執着が、なかなか根深いものであることを感じたのである。

藤村は着物でも食物でも独特な凝り方をしていて、その意味で相当ぜいたくであったと思う。飯倉片町の借家をただ外から見ただけの人には、その中でこういう凝った生活が営まれていることをちよつと想像しにくかった

であろう。しかしその質素な住宅が、また一つの凝り方であつたことを考えないと、藤村の個性は十分に理解されない。

これは衣食住の末に現われたことであるが、しかし同じような態度は、その仕事の全面を支配していたと言つてよい。おのれの好みに忠実であること、おのれの個性を大事にすること、これが藤村の仕事の筋金になつてゐる。『春』『家』『新生』『夜明け前』と続いた藤村の主要作品を押し出して来た力は、そこにあると思う。

ところで右にあげたような藤村の好みのなかにはつきりと現われている独自の性格は、それが無遠慮に発揮されないで、何となく人の気を兼ねるといふ色合いを持っていることである。

昔の日本人は、他人に見える着物の表面を質素なものにし、見えない裏に贅ぜいをつくす、というようなやり方を好んだ。これはもと幕府の奢侈しゃし禁止令に対して起こったことであるかもしれぬが、やがてそれが一つの好みになつてくると、奢侈をなし得る能力のあるものでも、それを遠慮した形で、他人に見せびらかさない形でやること

が、奥ゆかしいように感ぜられて来た。これは欧米人が、その奢侈をありのままに露呈してはばからないのに比べ、と、非常に異なつた好みである。世間をはばかり、控え目にするという態度そのものが、その好みの核心になつていたのである。こういう好みは日本でももう古風であるかもしれないが、藤村にはそれが強く働いていたと思う。金持ちの息子が立派な住居に住んでいるのを批評して、あれでよく恥ずかしくもないものだと言つた藤村の気持ちには、それがあつたであろう。彼はそういう住居を建てる資力を持つてゐるかもしれない、しかしそれは

彼自身が自分の仕事から得た資力ではないであろう、それならば彼は世間の手前そういう家に住むのを恥ずべきである。そう藤村は考えたのであろう。美しい住居そのものが無意義なのではない。彼自身も、「あのウイリアム・モリスのように、自分の心の世界と言ってもいいような家を作って、そして、そういうところに住んでみることは、決してぜいたくとは思いません。そこには生活というものと芸術とのおもしろい一致もあると思います。が、けれども私などの境涯では、そんなことは及びもつきませぬね」と言っている。問題は「境涯」なのである。

が、大正の末、五十幾つかになっていた藤村は、その数々の名篇をもつてしても、なお自分の境涯がそれにふさわしいとは認めなかったのである。そうすればどんな人が、生活と芸術との一致した家に住んでよいと認められたのであろうか。

が、他の人の気を兼ねるといふ傾向は、右のような好みにのみ基づくのではあるまい。物心がついて以後の藤村の生い立ちの苦勞が、この傾向と深く結びついているであろう。『桜の実の熟する時』や『春』などで見ると、藤村はその少年時代や青年時代を他人の庇護のもとに送

り、その年ごろに普通のわがままをほとんど発揮するところができなかつたのである。それに加えておのれの生家のいろいろな不幸をも早くから経験しなくてはならなかつた。無邪気な少年の心に、わがままを抑えるとか、他人の気を兼ねるとかの必要が、冷厳な現実としてのしかかってくる。これは一人の人の生涯にとっては非常に大きい事件だと言わなくてはなるまい。こうして、ありのままのおのれを卒直に露呈するという道は、早くから藤村の前にふさがれたのである。内からもり上がってくる青春の情熱は、それにもかかわらず、ありのままのおの

れを露呈するように迫ってくるが、しかしそういう激発があっても、普通の場合ならば傷痕を残さずにすむような出来事が、ここでは冷厳な現実のために、生涯癒えることのない大きい傷あとを残すことになる。従って青春の情熱そのものがここでは非常な不幸の原因になるのである。『春』は私が一高にいたころに発表されたものであるが、最初それを読んだ時には、この作の主人公を苦しめている根本の原因が、よくのみ込めなかった。私ばかりでなく、私の仲間も大抵そうであった。私たちには、「少年の時分から他人の中で育った」ということの意味

が、一向にわかっていかなかった。私たちはありのままを露呈するということをし少しもはばからなかったし、またそれを妨げようとする力をも骨身に徹するほどには経験していなかった。地方の農村で育った私でさえそうであったから、東京の山の手で育った連中は、一層そうであったであろう。ちようどそのころに、文芸ではありのままの現実を描写すると称する自然主義がはやり始めたし、思想の上では個人主義が私たちを捕えた。他人の気を兼ねるといふ気持ちは、そういう所へ押しつけられる体験を持たないわれわれには、単に因襲的なものとして、

あるいは無性格のしるしとして、排斥されてしまったのである。

しかし少年時代からこの苦勞をなめて来た藤村にとっては、それは、思想的遊戯の問題などではなかった。おそらく藤村自身それをはつきりと反省の材料となし得ないほどに、それは藤村のなかに深くしみ込んでいたであろう。藤村は、無性格などということはおよそ縁遠い、個性の強い人であった。その強い個性によっておのれの独自の世界をきり開いて行こうとする努力と、遠慮深い、他人の気を兼ねる習癖とが、藤村においてはいや応なし

に結びついてしまったのである。

芥川龍之介が自殺したときに、藤村は一文を書いた。それを書かせる機縁となったのは、芥川の『或阿呆の一生』のなかにある次の一句である。「彼は『新生』の主人公ほど老獺ろうかいな偽善者に出逢ったことはなかった」。藤村はそれを取り上げて、「私がああ『新生』で書こうとしたことも、その自分の意図も、おそらく芥川君には読んでもらえなかつたろう」と嘆いている。

ところで私もまた、『新生』が出始めた時分に、主人公が女主人公の妊娠を知って急に苦しみ始める個所を讀

んで、それから先を読み続けるのをやめた一人である。世間に知れるという怖れが主人公の苦しみの原因であつて、初めに女主人公と関係したことは何の苦しみをもひき起こしていないように見えたからである。この点はその後ゆっくりこの作を読み返してみても、やはりそうだと思つた。最初関係するところは非常に注意深く伏せてあつた。従つてこの作の主人公は、世間の思わくの前に苦しんでいるのであつて、おのれの良心の前に苦しんでいるのではない。もし『菊と刀』の著者がこの作を読んだのであつたならば、この個所を有名な証拠として引用

したのであろう。

が、そこにこそ問題があるのであることを、私は久しい間気づかなかった。世間の思わくの前に苦しむのであって、自分の良心の前に苦しむのではない、と言われ得るほど、他人の気を兼ねる習癖が、作者藤村の個性にこびりついていればこそ、藤村は『新生』のために悪戦苦闘したのである。少年時代以来の藤村の苦勞を、作品を通じて通観し得たときに、私にはやっとこのことがわかった。この苦勞が次の苦勞を生んだのである。ありのままのおのれを卒直に投げ出すような気持ちになれるため

に、作者も主人公もあのような苦労を積み重ねなくてはならなかったのである。

しかし『新生』を書いたことによって藤村があゝの習癖を完全に脱却したというのではない。『新生』は藤村があゝの習癖を自覚したということの証拠なのであって、脱却の運動はそこに始まったばかりなのである。少年のころから深く植えつけられた習癖が、そう簡単に抜き去られるものではない。

藤村の文体の特徴も、おそらくここに関係があるであ

ろう。ありのままを卒直に言ってしまうということとは、実際にありのままを表現し得るかどうかは別問題として、一つの性格的な態度である。その態度のもとに、素直な卒直な表現の仕方を作り出して行くためには、いろいろな苦心をしなくてはなるまいが、しかしその態度そのものは、割合に早く固定するもののように思われる。しかるに幼少のころから、他人の感情を害すまい、他人の誤解を受けまいというふうな用心によって、卒直な感情の表出を統制するように訓練されて来たとなると、右のような態度そのものが、何となく浅はかなような、奥

ゆかしさを欠いたものとして感ぜられるようになるであろう。そこには卒直な物言いの人の知らないような、細かいセンスが働くであろう。私はそういうセンスが藤村の文体と密接に関係しているように感じる。一例をあげると、藤村のしばしば使っている「……と言って見せた」という言い回しである。前後の連関から見ても、他の作者なら単純に「……と言った」としてしまふところに、藤村はわざわざこの言い方を使っているのである。ところで、「言ってみせる」という言葉は、「言う」というのと同じ意味ではない。してみせるとか、着てみせるとか

と同じように、言ってみせるのもまた「試みに言う」のであって、取りかえしのつかない実践的な人格の発動としての「言う」行為なのではない。人が笑いながら「殺すぞ、と言ってみせた」としても、相手は殺意などを感じはしない。しかるに藤村は、作中の人物がまじめに相手に対して言葉によって働きかけている場合にも、「と言ってみせた」という描写をやっているのである。同情なしに見る人は、ここに思わせぶりな態度とか、特殊な癖とかを認めるであろう。しかし藤村がわざわざこういう言い回しをするには、何かそう言わずにいられないも

のがあるのだと考えなくてはならぬ。それは、この人物がこの場合、言葉に現わしきれない、どういっていいかわからない気持ちを抱きながら、何とかいわずにいられなくて、試みにこうでも言い現わしたらどうであろうかという態度で、そう言った、ということなのであろう。そういう気持ちで、「……と言ってみせた」という言い回しで十分現わされているかどうかは、別問題である。が、とにかくそういうセンスが働いてあの文体ができているということは、認めなくてはなるまい。

藤村自身も『言葉の術』のなかで言っている。「言葉

というものに重きを置けば置くほど、私は言葉の力なさ、不自由さを感じずる。自分等の思うことがいくらかも言葉で書きあらわせるものでないと感じずる。そこで私には、物が言い切れない」。岩野泡鳴いわのほうめいのように、あけ放しに物の言える人から見ると、藤村の書いたものは思わせぶりに感じられたかもしれぬが、物の言い切れない藤村から見ると、泡鳴のように物を言い切ってしまう人は、話せないように感じられる、というのである。つまり藤村は、自分の文体が物の言い切れない文体、「……と言つて見せる」文体であることを認めているのである。

幼少のころから他人の気を兼ねて育ったということ
は、それほどまでに深く藤村のなかに食い入っていると
思う。

が、この幼少以来の苦労のおかげで、藤村の描いた世
界のなかには、一つの非常にはつきりとした特徴が結晶
している。

私は『夜明け前』を読んだ時にそれを痛切に感じたの
である。この作にはかなりいろいろな人物が現われてく
るが、作者はどの人物をも同情をもって描き、それぞれ
にその所を得させるように努めている。従っていろいろ

ないやな事件が起こるにかかわらず、いやな人物は一人も出て来ない。作の世界全体に叙情詩的な気分が行きわたり、不幸や苦しみのなかにもほのぼのとした暖かみを感じられる。これは全く独特な光景だと私は思ったのである。

しかし考えてみると、この特徴はすでに『春』や『家』や『新生』などにも現われている。作者はどの人物をも責める態度で描くということがない。ちようど「物が言い切れない」と言われていると同様に、人物をも一つの性格に片づけ切れないという趣が見える。苦労した人の

目から見れば、人生はそういうふうに見えるかもしれない。遠くから見て、不埒ふらちな、怪けしからぬ人物に見えていても、その人の立場に立てば、そうでないいろいろな点がある、ということになるのであろう。それを思いやり、そういう人の気をも兼ねるということになれば、作中の人物をくつきりと浮き彫りにし、それぞれにあらわな特徴を与えるということは、ちよつとやりにくくなる。どの人物の言行にも、はつきりと片づいた動機づけをすることができない。それが作の世界全体に叙情的な色調を与えるゆえんなのであろう。

私はこの態度が作者として取るべき唯一の道だとは思っていない。ありのままを卒直に言おうとする態度の人、物を言い切る人、人の気を兼ねるということをしない人でも、その態度によってひき起こすいろいろな苦勞をしなくてはならないのである。またその苦勞によって得た体験を書き現わそうとする場合には、この態度につきまとう独特な困難、すなわち主観的見方のなかに落ち込んでしまうという困難を切りぬけるために、特に烈はげしい苦心をしなくてはならないであろう。しかしそれを切りぬけて出た作者は、その卒直な態度のゆえに、また物を言

い切る明快さのゆえに、物の形のくつきりとした、明澄めいちような世界を作り出すことができるであろう。そういう作の中には、非常によい人物と、非常にいやな人物とが、並んで現われるかも知れない。作者は作中の人物を平等に愛するのではなく、一を愛し他を憎むのであるが、そういう愛憎の卒直な表現からでも、我々は優れた作品を期待することができるといえる。

しかし藤村の個性はそうでない態度の上に立っているのである。だから藤村の作品からその個性にないようなものを求めるのは、見当違いだと思ふ。藤村の作品から

は我々は苦勞人の目から見たしみじみとした人生の味を
味わい取ることができ。特に藤村が全力を集注して書
いた数篇の長篇は、くり返して読むに価する滋味に富ん
だものである。またくり返して読ませるだけの力を持つ
た作品である。

(昭和二十六年二月)

日本文学電子図書館

「和辻哲郎隨筆集」

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

1995年9月18日 第1刷発行

日本文学電子図書館